

國學院大學學術情報リポジトリ

源氏物語の漢詩文表現研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笹川, 勲, Sasagawa, Isao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002426

「源氏物語の漢詩文表現研究」論文要旨

笹川 勲

本学位申請論文は、序および結と、四篇十四章の論考によって構成される。本論文の目的は、『源氏物語』の作中における漢詩文の典拠や漢詩文に由来する表現が、物語世界においてどのように息づいているのかを論究することである。

「序」では、『源氏物語』の和漢比較文学研究の研究史を概観するとともに、本論文における課題を提起する。論文の題目に掲げる「漢詩文表現」とは、これまで研究が積み重ねられてきた、『源氏物語』と中国や日本の漢詩文との、主題や構想、表現を比較する「源氏物語と漢詩文」の他に、作中人物たちの、漢詩文創作や漢籍の学問、その結果として得られた漢詩文の素養、さらには儒者の形象とといった「源氏物語の漢詩文」という研究対象をも意味することを述べた。

第一篇「物語の展開と漢詩文表現」は五章からなる。第一章「源氏物語の「才」と「漢才」」は、漢語「才」と平安時代語「才」との相違を明らかにし、近接することばによって、①漢学・漢詩文の素養、②音楽や藝能の素養、③仏典・仏教の素養の三つに類別することかできることを述べる。その上で、①を「漢才」として特立し、先行する作品である『うつほ物語』の「漢才」とも比較しながら、「漢才」は物語の主題のひとつである政治の主題を下支えするともに、作中人物の政治的栄達を保障していることを確認した。

第二章「光源氏の「漢才」と政治家像」は、臣籍に下される光源氏に、桐壺帝が、「漢才」の習得を重視する教育方針をとった意味を考察する。桐壺帝が光源氏に期待したものは、「朝廷の御後見」として天皇親政を推し進め、外戚と対抗する勢力の中心となることであつた。外戚と対抗する勢力とは、大学寮出身の文人政治家たちである。彼らは「漢才」という能力の優劣によって評価されることを是とするともいえ、律令政治的な天皇親政を望ましい政治としていると考えられる。桐壺帝の意図のもと、政治家としての人生を歩む光源氏は、彼らと連帯しつつ天皇親政の世、詩文隆盛の世を理想とする政治家として形象されていることを明らかにした。

第三章「夕霧の「漢才」と呼称」は、光源氏と左大臣家の息女である葵の上との間に生まれた嫡男夕霧の人物形象を「漢才」と呼称から論じる。夕霧は「大殿腹の若君」やその類例によって呼称されるが、これらの呼称は光源氏の嫡男であることよりも、左大臣家に連なる人物像を想起させる。本来であれば、自邸で行うべき元服の

儀式も、祖母大宮たつての希望ということで三条邸で行われている。光源氏は、夕霧を自らの後継者として据え直すために、夕霧の大学寮入学と「漢才」習得を決断し、元服儀礼の代替として、二条院で字の儀式を催している。学問に励むためとして、三条邸への来訪を制限された夕霧は、その呼称も「大殿腹の若君」から、「大学の君」へと変化している。夕霧は寮試や「放島の試み」として行われた省試に及第し、官途を歩み始めるが、学問や「漢才」に対して不信感や反発を抱く夕霧は、子弟に学問を勧めなかったことを明らかにした。

第四章「柏木の「漢才」と言葉」は、いまわの際の柏木が、『孝経』や『論語』を引いた意味を論じる。『孝経』と『論語』は、大学寮の明経道や紀伝道においては必修の漢籍とされ、その価値観は、平安朝貴族社会に深く浸透していたことを、光源氏や内大臣、冷泉帝の、孝養が読み取れる場面から確認する。柏木の場合、朱雀院からすぐれた「漢才」を評され、「柏木」巻頭の長大な心内語では、親に先立つ不孝と官途を全うせずに息絶える不忠とを吐露していた。ここから律令官人、朝臣としての柏木像を確認する。しかし柏木は、約束された政治的栄達を抛って、女三の宮への恋に惑溺する。柏木の「漢才」は身を律することはなく、自らを孝子忠臣として装うための具となっていたことを明らかにした。

第五章「宇治八の宮の「才」と「漢才」」は、宇治八の宮の人物形象を視点として、続篇の物語における「才」と「漢才」のありようを問うた。宇治八の宮は、「漢才」は十分に習得することができず、その結果、政治的敗者となったことを指摘する一方、音楽や藝能、仏教についてはすぐれた「才」を持っていたことを確認した。正篇の物語では、政治的栄達の主題を下支えた「漢才」だが、続篇の世界ではその権威は失墜している。勾宮の家司として出世に汲々とする大内記道定や、八の宮の女である大君や中の君をわが物にしようとして、濃い俗臭を漂わせる冷泉帝に、「漢才」の権威の失墜が表象されていることを述べ、正篇の世界では、光源氏の主催する儀式を莊嚴するに過ぎなかった仏教の「才」が、続篇の世界、とりわけ宇治十帖の首巻である「橋姫」巻では、物語を展開させる力となっており、八の宮は正篇における「才」と「漢才」のありようを問い質すべく形象されたことを明らかにした。

第二篇「政治の主題と漢詩文表現」は四章からなる。第一章「「桐壺」巻の予言と漢詩文表現——鴻臚館の光る君——」は、高麗人の観相と予言が、なぜ鴻臚館という場で行なわれ、高麗人と光る君、光る君の後見役として同道した右大弁が漢詩句を作り交わしたのか、という予言の周縁を論じる。まず、高麗人は渤海使であり、平安時代の鴻臚館は、渤海使の滞在する施設としてあったことを確認する。

渤海使の応接を担ったのは文士たちであった。彼らは国家の代表として漢詩文の応酬を渤海使と繰り広げた。『源氏物語』の時代は、鴻臚館は荒廃して既に久しい。にもかかわらず鴻臚館が、観相と予言の場として設定されたことは、文士たちの営みの歴史に、この場面を連結させる意があったとする。

次いで、右大弁の人物形象に、渤海使と濃やかな交誼を結んだ菅原道真の姿を読み取る。また、道真が著した「鴻臚贈答詩序」にある「吾党五人」の措辞に注目し、排他的ともいえる文人社会の連帯と抗争を指摘する。その上で、『源氏物語』においても、光源氏を中心として文士や大学寮出身の殿上人が連帯し、「党」と見なしうる集団が形成されていたとする。さらに、高麗人の詩意と大江朝綱の「夏夜於鴻臚館餞北客詩序」との類似性を論ずる。朝綱の文才を讃えた渤海使が、再度来朝した際、朝綱が大臣に至っていないことを歎いたというものである。いっぽう、高麗人に文才を讃えられた光る君は、長じて冷泉帝の後見として御世を領導する地位を得る。のみならず朝綱のような文士や大学寮出身者を拔擢登用している。これら渤海使と日本の文士たちとの営みを表現の基底に潜められた予言の周縁は、光源氏の政治家としての人生行路を、集約的に示すものであったことを明らかにした。

第二章「朱雀帝御世の詩と漢詩文表現」は、「須磨」巻において、光源氏と都の親王や上達部たちが取り交わした漢詩文がもてはやされたことに、弘徽殿太后が強い不快感を示した背景を考察する。先行研究では取り交わされた漢詩文に、政治批判が想定されているが、表現上その真意は不明である。そもそも漢詩の政治性とは、諷諫の意だけでなく天子の威徳を讃美する役割もあったことをまず確認する。次に、朱雀帝御世の政情について、外戚の専横を基調として、血統や血縁が重んじられ、能力があっても顧みられることのない人材が多く埋もれている世であることを指摘した。「賢木」巻に描かれる光源氏と彼に与する文士や殿上人の営む作文会や韻塞といった文事は、朱雀帝の周辺からすれば政治的に非主流の立場にある者たちだが、御世を譏り、謀議を廻らせているかのように書きなされていることを指摘する。

いっぽう、朱雀帝の周辺でも内宴が行われていることから、文事が全く絶えてはいなかったことを確認した。しかし、朱雀帝御世の文事は光源氏周辺の文事に比して、質的に見劣りするものであり、そのことが弘徽殿太后の光源氏の文事に対する苛立ちとなまっていることを論じる。朱雀帝も理想としていた桐壺帝の御世は、南殿の桜の宴に象徴されるように、漢詩文に堪能な人々が多く輩出された世、聖代として物語の中で位置づけられている。朱雀帝はその理想を継承する意思はあったものの、外戚の専横の下、不如意な結果に終わ

っており、弘徽殿大后の不快感の背景にあったものとは、凋落したはずの光源氏が、優れた詩や文事によって世の賞讃を集めているいたことであつたことを明らかにした。

第三章「「滯標」巻の讓国と漢詩文表現―致仕大臣の招聘と光源氏の政治構想―」は、朱雀帝の讓国に伴う光源氏の政治構想を、古注釈に指摘される典拠を軸に検証し、明らかにする。冷泉帝の即位によって、光源氏は後見として、摂政となることは衆目の一致するところであつた。しかし、光源氏は舅であるかつての左大臣、致仕大臣に摂政を移譲する。先行研究では、光源氏と致仕大臣との関係から、考察が重ねられてきた場面だが、本論で摂政が設置される対象である冷泉帝の存在と光源氏の摂政就任が、朱雀帝の内意であつたことに注目した。両者の意義や内実は、ともに光源氏の思惑、政治構想に拠ると考えられる。古注釈では、致仕大臣の典拠として、『史記』『留侯世家』の商山四皓が指摘されている。彼らは、呂后の招聘に従い、孝惠帝に与すること、高祖の後継者として權威づけた。「滯標」巻では、呂后は光源氏に、孝惠帝は冷泉帝にあたる。一方、「賢木」巻では、『史記』『呂后本紀』に基づき、朱雀帝は孝惠帝、弘徽殿大后は呂后として擬せられている。光源氏と弘徽殿大后は、同じ人物を用いつつ、異なる故事を典拠とすること、心象を描き分けられている。自派による権力掌握と政敵の排除という点では、御世替わりの前後で大差はない。しかし、典拠となった故事の違いによって、その印象は大きく異なる。四皓の招聘は、聖代には、隠遁した賢人が出仕するという「野無遺賢」（『尚書』）の政道観に通底する。光源氏の政治構想とは、四皓に比定される致仕大臣を招聘することにより、朱雀帝の御世を「世の中定まらぬをり」として認めない一方、不義の御子冷泉帝の御世を、「をさまれる世」として粉飾することであつたことを明らかにした。

第四章「「松風」巻の詩宴―桂の院の光源氏と渚の院の惟喬親王―」は、「松風」で語られる光源氏の桂の院の詩宴が、『伊勢物語』八十二段を典拠としたものであることを、物語の舞台となる土地、営まれた遊び、月の描写から明らかにする。桂の院のある大堰の地は宇多法皇や嵯峨天皇ゆかりの地である。いっぽう惟喬親王主従が遊んだのは、「山崎のあなた」として把握される交野や水無瀬である。山崎の地は嵯峨天皇の離宮が営まれ、『文華秀麗集』の「河陽十首」が作られた場でもある。嵯峨天皇宇多法皇も政治に強い意欲を持っていたことが知られていることを確認した。光源氏が嵯峨天皇や宇多法皇の事跡を残した場をなぞるように訪れているのに対し、惟喬親王は、嵯峨天皇の王威の記憶された山崎の地ではなく、交野や水無瀬、さらには「天の河といふところ」へと至っている。ここから、光源氏の政治性と惟喬親王の脱政治性を読み取った。

渚の院で惟喬親王主従は、狩獵を早々に切り上げ、和歌を伴った酒宴に移行している。対して桂の院では、光源氏の許に鷹狩や鵜飼で得られた獲物が奉られ、漢詩を伴う酒宴が催されている。狩獵は王威を誇示する場ともなるが、惟喬親王主従の行動からは、和歌という非政治的な文藝を唱和していることも相俟って、皇位継承の断念という、政治的敗北の自覚が読み取れる。片や光源氏の遊宴では、漢詩という政治性の強い文藝によって同調者たちとの紐帯を強化している。光源氏は、嵯峨天皇主従を想起させる君臣唱和の中心にあつて、政治的栄達の歩みのなかの一齣たり得ているとした。

『伊勢物語』八十二段では沈む月が、「松風」巻では昇る月がそれぞれ描かれている。月は皇統の尊貴性、あるいは天皇の威光をも象徴する事物であつた。沈む月は惟喬親王を、昇る月は光源氏をそれぞれ表象したものであり、それぞれの政治的な行く末を暗示するものであることを明らかにした。

第三篇「作中人物の形象と漢詩文表現」は、三章からなる。第一章「叔母北の方の形象と漢詩文表現——「蓬生」巻と新樂府「塩商婦」——」は、「蓬生」巻に、受領の北の方、後に大貳の北の方として登場する末摘花の叔母を論じる。「蓬生」巻は、受領の富と末摘花の貧とが対比的に描かれる巻である。その形象にはともに漢詩文の典拠が指摘されているが、末摘花と直接対峙し、受領の富を体现する叔母北の方の形象に、漢詩文の典拠は示されてこなかった。本章では、叔母北の方の典拠として白居易の新樂府にある「塩商婦」を採り上げた。「塩商婦」は、塩商人の妻が夫の財力を背景にして勢威を誇ることを批判した作品である。叔母北の方も塩商人の妻と同じく、夫である受領の富を背景に、末摘花に対して高圧的な態度を取っている。

次いで、「塩商婦」では塩商人の妻であつたものが、「蓬生」巻では受領の北の方となつた背景を論じた。中国では塩は専売制を取り、塩商人は莫大な蓄財をなした。いっぽう日本の宮廷社会では、塩は国家から支給される物資であり、紫式部も塩が富を生むものであるという意識に欠けていた可能性を指摘する。日本の宮廷社会に生きる人々にとつて、莫大な財を成す存在といえれば受領に任じられた人々であり、そのため典拠では塩商人の妻であつたものが、受領の北の方に置き換えられたと論証した。「蓬生」巻末では、末摘花は光源氏の庇護を受けるようになり、そのことを聞いた叔母北の方が吃驚する姿が語られている。長い省筆の言で、「蓬生」巻が締め括られる中、敢えて叔母北の方の動静に筆が割かれたところに、新樂府の批判精神を読み取ることができることを明らかにした。

第二章「藤壺宮の形象と漢詩文表現——「朝顔」巻末と尤物論——」は、藤壺宮の形象と、彼女に寄せる光源氏の想いの源泉として、尤

物に惑う男の主題を想定し、特に白居易周辺の漢詩文から考察した。「朝顔」巻末では、光源氏の夢枕に藤壺宮の死霊が現れ、紫の上に自らとの密通を示唆した光源氏を詰る。にもかかわらず光源氏は、自らとの密通の末、成仏できぬ藤壺宮を悲しみ、冥界に訪ねて、その苦しみを代わりたいたいとまで願う。光源氏の激しい藤壺宮思慕の背景には、尤物に惑う男を主題とした漢詩文の摂取があることを論じる。

尤物とは、元来、「美人、美女」の意であるが、単なる美女ではなく、国を傾け、滅ぼすものとして認識されていた。その後、中期に再び見いだされた尤物は、「長恨歌」や「李夫人」、「鶯鶯伝」など白居易とその周辺の作品において、女主人公として形象化される。それらはいずれも尤物に惑うことへの、誠めや諭しを主題としていた。平安朝の漢詩文において尤物の語は、見立て表現に用いられるに止まる。しかし、物語作品には、尤物論が摂取された痕跡が見られ、『源氏物語』では、桐壺更衣の形象に「長恨歌」が用いられるが、その背後に「李夫人」も用いられていることは、既に指摘されている。しかし、桐壺更衣の形代とである藤壺宮にも、「長恨歌」や「李夫人」の主題を見るべきであろう。また、「朝顔」巻末の藤壺宮は、光源氏に愛執の念を訴えている。この形象は、「鶯鶯伝」で、鶯鶯が張生に送った手紙において吐露した恋情の表現に類似する。張生は、鶯鶯のことを尤物として認識している。また、藤壺宮の死後、物語第一の女君となった紫の上や晩年に迎えた正妻女三の宮はいずれも藤壺宮の姪であり、藤壺宮の生前も死後も、宮に尽きせぬ恋情を抱く光源氏が、物語に形象されている。藤壺宮は尤物としての本性を内包した女君であり、光源氏は尤物に惑う男として形象されていた。しかし、『源氏物語』は漢詩文において主題とされた、誠めや諭しよりも、女色の魅力、恋情の魔力を主題とするところに、漢詩文を越えようとする作意があったことを明らかにした。

第三章「御師の大内記」の形象と漢詩文表現―『源氏物語』の儒者たち―は、「少女」巻で夕霧の師として登場する大内記の人物形象を論じる。夕霧の大学寮入学は、冷泉帝の御世を聖代として据え直す施策の一環として行われたことをまず確認した。大内記という官職は、大学寮紀伝道の修了試験ともいうべき対策に及第し、文章にも秀でた儒者から任用されることをおさえるとともに、儒者や学問の世界の頂点に立つともいえる文章博士について、史実では『源氏物語』の時代では、菅原道真のような栄達を極めることは過去の事例となつたものの、儒者や学問の世界ではその権威はまだ揺らいでおらず、文章博士の権威が戯画化されつつも描かれていることを述べた。次いで「少女」巻の大内記の人物形象を「すげなし」

ということばから論じた。「すげなし」は、「そっけない、冷淡だ」といった意であるが、大内記が「すげなし」なのか、大内記と相対する何物かが「すげなし」なのかは説が分かれる。用例の分析から、大内記と相対する何物かが「すげなし」と評価されていることを指摘した。その背景として、『源氏物語』が成立した時代の儒者の世界が、大学寮教官職を世襲する「累代」と、自ら志して学問の世界に参入した「起家」に分かれていたことを確認した。「累代」の儒者が残した詩文には、「起家」の儒者に対するあからさまな差別意識が表れており、大内記がすぐれた漢才に比して、「すげなく」扱われていた理由も、そこにあったことを指摘した。「起家」出身の大内記が夕霧の師として拔擢され、さらなる栄達を予感させて退場したことに、光源氏が冷泉帝の御世をすぐれた人材が多く輩出する聖代として据え直そうとしていた意図を明らかにした。

第四篇「寛弘期の文学と漢詩文表現」は二章からなる。第一章「紫式部日記の漢詩文表現」は、『紫式部日記』に見られる「漢才」記事を採り上げ、『源氏物語』の漢詩文表現とのかかわりを、寛弘という時代の中で論じた。『紫式部日記』には、紫式部の「漢才」に対して、父である藤原為時、主人である彰子の父である藤原道長、彰子の夫君である一条天皇の三者から、優れた評価を与えられたことが言及されている。特に一条天皇の、「この人は日本紀をこそ読みたまふべけれ。まことに才あるべし」という評言は、『源氏物語』への評価にもなっており注目される。『源氏物語』は、一条天皇や藤原公任といった貴紳を読者として評判を得たことも記されている。『紫式部日記』における「漢才」記事と源氏物語関連記事は、ともに紫式部という人間が優れた能力を持っていることを表現しているといつてよい。『続本朝往生伝』や『十訓抄』には、一条天皇が自らの御世を人材の輩出した時代として語っていたとある。人材の輩出は、優れた御世、聖代の表徴のひとつである。紫式部は、自らもまた「漢才」に優れ、かつ、貴紳の読者と評判をも得た『源氏物語』を著したことを、『紫式部日記』において表現することで、一条天皇の御世、ことに寛弘の世がいかに優れていたのか、書き記そうとしていることを明らかにした。

第二章「本朝麗藻の积奠詩と源氏物語の漢詩文表現」は、『本朝麗藻』に収められる积奠詩と、『源氏物語』「桐壺」巻の国際意識や聖代観の共通性を論じる。积奠は、孔子を祀る宫廷儀礼であり、経書の講読と講読された経書を主題とした詩宴が式次第に組み込まれている。『本朝麗藻』には二首の积奠詩が収められるが、菅原道真や島田忠臣の积奠詩に比して、異邦人が日本の天皇の徳を慕って来朝することを題材として、一条天皇を讃美し、その御世を聖代とみなす内容となっている。また、二首には「葵」と「向日」という

共通する措辞があり、ここからも前記の主題が読み取れることを述べる。その上で、『源氏物語』『桐壺』巻で、鴻臚館に高麗人が滞在していることもまた、『本朝麗藻』に同じく、異邦人の来朝を以て天皇を讃美し、その御世を聖代として位置づける国際意識や聖代観の表れであることを明らかにした。

本学位申請論文は、「源氏物語と漢詩文」、「源氏物語の漢詩文」という二つの視点から、『源氏物語』の漢詩文表現を明らかにしようとしたものである。特に従来の研究では体系化に論じられたとは言い難かった「源氏物語の漢詩文」を論じることにより意を用いた。『源氏物語』の漢詩文表現は、漢詩文やその一部、あるいは和歌や和文の表現となったものを単純に引用するのみではない。物語の表現に浸透した、漢詩文の主題や構想、あるいはそれらを創造の糧とした、紫式部の作意による表現を読み解いていく必要があると考える。

平安朝において、第一等の文藝であり続けたのは漢詩文であり、物語は女の消閑の具と見なされていた。しかし『源氏物語』は女ばかりでなく、男の読者を得ていたことが、『紫式部日記』に記されている。なぜ、『源氏物語』は男の読者を得ることができたのか。種々の理由が想定できようが、そのひとつとして『源氏物語』は、虚構を通して、彼らが親しんでいた漢籍と相通じる、政治や社会、あるいは人間の生き方の諸相と真実を凝視していたからといえよう。これらを描出するべく紫式部が選り取った方法こそ、漢詩文表現であったと考える。